嫐（うハなり）草紙

合五冊

へ遠 13
1891

序　宇和奈小利莫筏

淮南子曰無準縄雖魯般不能以定曲直蓋六經也者準縄而憧昏者以六經為閥遠微妙而難由芒乎無意於為準縄嗚呼夫也不移何以為準縄哉惟有所載干稗官小説之義士賢媛留人妒婦之蹤迹照晰可觀者使彼由之則足以為定其曲直之準縄矣語所謂三人行必得我師焉者是已今也淡海子寓言於妒婦阿艶而作

此編呼吸華實叙述褒貶又含混於一時奇事欲使夫女子小人讀之且舞蹈且戰競而自勸善懲惡不亦爲準繩乎其是準繩也彼以之爲準繩而正曲直則或反其本哉

天明二壬寅正月吉日

草紙巻之一目録

壱 両國橋の事

弐 五十嵐か家譜

三 いおや熱七か事

四 五十嵐乃縁族内義を異見の事

[illegible]草紙巻之一

㊀兩國橋此事

繋しくハ猛龍の横卧せる勢ひに似たり総州と尾とし武蔵を左右とせし鵝峯先生が兩國橋小題せる詩ありそもそもこのはしハ明暦年中にはじめてかけられむさしと下総の堺り跨せバとて兩國橋と名付たるとぞされど元来むさしと下総の堺ハ利根川なるを中昔ハ葛飾郡総州に屬せしこともありしとやさて

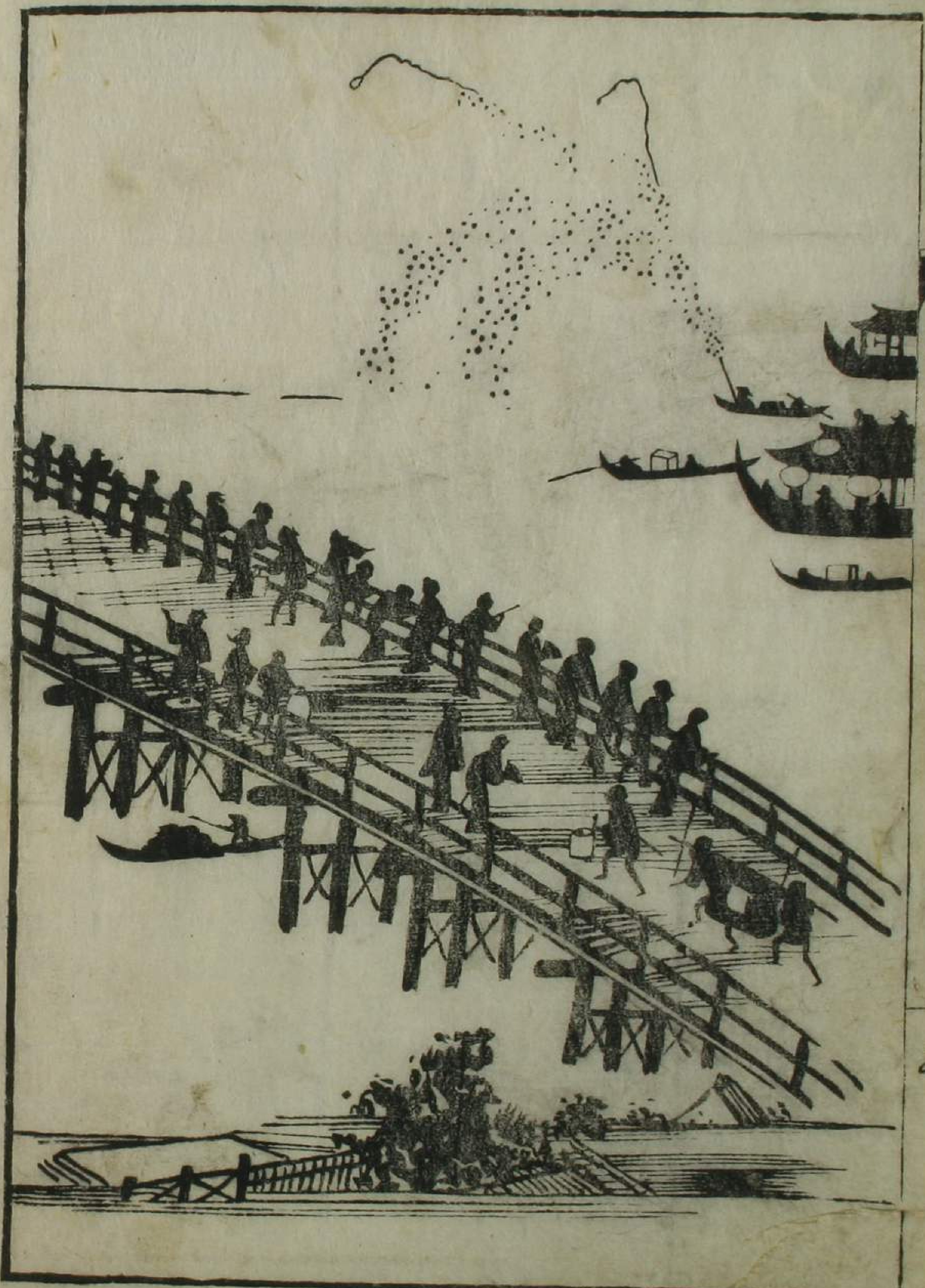
この所乃みぎはいふもさらなく二六时中佗遊の
さゞめきすゞしとりどき盤笈れこころハ二列乃岩
岩ゟ万脚の床ハ目前の琴臺をなし龍骨の
龍宮を眺して白昼ならし美酒乃池佳肴の
山てんとう丸のこゝろハ吉野丸ひをどりて
そされ風光がありやそれ玉屋が花火にしめける
徂来翁が両国橋を櫂を鞆して歌ふとつゝり
しとこのおもしろさなるべし花形角力をこらし
つけ達磨おしこれいやみまくいづれ云めて

わけて天竺浪人が根なし草にとふりまた述ば
今更いふも筆をすさみなりかく繁華の地なれ
ども東都の名物をしるさんにその中に五十や云庫
が製せる冠髪香と云る伽羅之油とよく髪を
ましはやをさ出し老よりわかきまで白髪を生
ぜざりし衣服につきてあらはれたる龍麝
の匂ひぷん〳〵とかされハ燕都の光織ハいふ
におよばず他国の旅人まてつたへてお歯をそめる
ひなのこむすめまで此見男に立よらざるハなかりき

（二）五十嵐の家譜

爰に人皇五十一代平城天皇ハ大同三年戊子の
としにあたつてむくり国ハえびすきやうと語らひ憲
宗帝ハ世をうかゞんとむほんをくはだてその
ついでにこの日本国をもおびやかさんとぞくせん
七百よそうつしまハおしよせきたるよし日数乃
ちうしんきうりありけれバ公卿殿上人おゝて
ふためきてそのころ弓勢のきこへありし名将
百合若太臣を大将軍とし其むきは郎等

又ハ別府の何武者雲足をとて雲住ありけん
門の太夫ひでぬしが一子崎丸還成太郎義若
が一子菊丸その名きこゆる武勇ハ家士木曽の
勢三万余騎にて西海にぞおもむきけりこの
時近松子の野守鏡ヲ詳あれバくハしく
もいをださて申すまる太臣ハむくりのぞくとを
やそくとさいしく凱津のおりから此祝の軍
おつくれまやまされん中をよりし気あやちくく
が沖よりか鳴て三日三夜ぞふしまふそのおいぶよ



成山画図

別府兄弟悪心をせうじて一ツの大将軍を試まり
捨をき道をきり断橋をひいて諸軍を引率
し上洛して主人の手柄を家物にして
あまつさへ大臣ハうち死と奏し一ツの勲録
を押領せしこそふとどきなれ百合若大臣ハ
元さめてあたりを見わたすに今までおびたゞし
かりし軍勢ハ聲も松風の音にのこりなん
ぴんとひるぐくりしたるども八千鳥かも元は
飛ちふのそみてさしもの勇気もくじけて

これハあさましハおもひいとゞうし風よいそう何
なぐさむるものよほされぬ鷺丸ちゝる九二人のうち
さく主人別府兄弟が悪心をうらとそ大臣ハ也ゑや
ぞくせたりやとむの鳴よそでまり居たりしに
おしハんぞもなくさみなひろそのゝち五とせ
を経て佛神の擁護やありけん鷹の玉章
をたよりにつけてふしぎに帰国のさいもいちおう
別府兄弟を亡しもとの官位を業へ玉ひ
ひしと其時この二人乃忠臣に百合若の百の

字を筆紀されあらへまひ崎丸ハ五十さき
幡丸ハ五十幡と姓をたまひしより今に五十崎五
十幡氏の人々所々にあるハこれこの二人乃末葉
なるよし本朝苗字始といふ書まて見へたりさて
このいがの崎ちくらが沖まて大臣につくし折から
その所乃あまをとめに馴染ける事あり大臣
帰洛ありせしもこの海士ぬのくまれをおしミ
涕泣かぎりなかりしハ不便ながら一まづ君様
都へりをくりなりなせんどとも見とゞけてこそ

まきゆりこんいなばの山なる袮ともまけの葉は
たじしくきゝへぬんをおそとちぎりて立されれ
ける玄は紫乃まをれびさく大臣家はさくへを
ことぶきおもりて又ちくらが沖へぞりけり
けるそのこゝろざせはまことあるその約をた
ぐざるもさく義士といふべしとさ人感じ
あへりけりさてしも五十さきハこの偶は海士
と偕老同穴のちぎり浅からで子供あまる
出生より世のいとなそまふこのうへれ家をとり

本艸曰松子作油
無毒塗頭長髪

昔の鴻はひげしある山に出る蝋をとりて加へ髪は油を製し是を中華の商船にひきて世をたくりぬその後数百年は星霜を経て後光明院の御宇慶安のはじめ此五十嵐が先祖五十屋東見といふ人摂津の國兵庫の津に出て此油を諸国へひろめ此時京都室町に八髭の久吉といふ人あり東見が製に麝香鶏舌などの薬種をくはへて伽羅の油と名付ひろめしより後五十屋東見京都にて

縄手に出て此油をひさぎり三日本にれこ乃ころかて
も胡麻の油に白檀丁子などを浸して匂ひ油と称ぜしのまれバこの製法ひろまりしきとてちやしぬ延宝のはじめ五十屋東見老人江戸へ下り両国橋乃西詰に油舗行をひらきて諸の家の繁昌せりその子東ゑは後の西兵庫にて出生せしかバ後いつや兵庫と改名しそれより子孫つゞきて今の五十や迄七ゑ八九代なりときこえし

五十屋
御伽羅油

御伽羅油

㊂いがや惣七が事

五十や曹七八さる国守の家中にてもおもく
しき人の末子なり兄ハこそ武門のあるを
この曹七八幼少おちらり柔和にてろだくやさし
くおのてよくきちまれつきなれバ一人の商
家にせだやしくこの五十やへ宝暦中
養子にきたるり養父五十や曹太郎八五六年
以前に死去し実子おきよといへるむすめに
今の曹七をめあちせいとま夫婦中むつまじく

見へしまるるにこの家にむすめおきよ幼少
より仏法に帰依して十三才のとし一生不犯
の願をおこしひとへに後世のことをのみ祈
ひつま曹七にもちぎりしよりしつくしよし
をいひきかせたるおのてむきだくりの女夫中
なり一家親類勿論かくの者まかせくを
ぶんくこの事をのれきいてくさてくある
らぬまめのを持くさるかしにそのまとおし
まぬ人しそなりあれさてこの亭主曹七八元文

三年はとしの秋出世してとし明和六己丑はる
に三十二歳なりし武家にそだちけれバ
その人柄いやしからずされども人
よからず諸藝に達しけれど人をある
づけよく家をそくの人身をおさむるの器を
ところ人かわありそのうへ男ぶりきよいうして
在中ね光源氏ハ古風にてやぶしけれバたとへ
ぞその悪霊ハ市川雷蔵が気地よる風やの
志年れなつく十町があいきやうをそへたらんと

おもおぐるしくせいさうしぞひくからずがつ
とり男ははなも實体むきにかくかる美男とと
まさあるまじとおのおよつげても志の内義
の一生不犯の願をおこしてかくる色男にも
身をまかせざるをそよくは信心者なれと
人も感しぬ

㊁五十やは縁ぞく内義に異見のあす
いづのやはちんろい中にとりてきたのもしき
人ありく内義おきよう信心もさるるあゆぐる

おくてん子も出来ぬものあれバあくれさくへも
いらざるらん後なきを不孝とも書物にも
みへたりなどいへバきれもいりまするなさき
ていしのかくるゝまではおもちでも妾女ぐる
ひまでもちぢまりいまでで乃実辞するにひき
くらいゆちあるんよもなくさへ時は家の
ためあしかればなどいろく伯父伯母をはじめ
従弟又従弟までも内より内義おきなよと
異見せしも聞なりと内義もかつとも以異

えんとはおかく夫婦か一生不犯とちかひて
ちや十年あまりはとめきたりしを今さら
すがらんものなきれバ出ののくへハ三十七どのゝ氣よ
入らん女子をめかけすしてむつかせや
さきよしやかれバげふかつともさて三十七にも
ちぐいひきなせるまこれとめかけ奉公人を
せんぎしかり

文明堂

草紙巻之二目録

五 顔おはやが変
六 こしもとおつるが糸
七 色の世の中

草紙巻之二 ㊄ 妾おはやが井

在原業助が好色志に曰妾一名側室和名
めかけ或大名がたにては御部屋などと云下〻にては御座直
遊しき国者などいへり上方にては諸大名方へ
かゝへさせしむてうけはよろしき者親許より
くしく仕立る事なり町人も素よりなれ家
内のえまつべ子どもれを諸なきさをるを経女と
いひ若くは又下女にしくかわいがるを二仕といふ
ありいづれも氏素姓をえらぶにたゞむつかしと

うつくしき口もときよし　さる牢人行蔵の娘
やさ文月園といふ女あり去ヶ月より武家にて
三人あるひは五人して出しわいいろ何日は誰が書と
日限をきめておそぶも行り是らハ子がてこの
親仁ちやまかつりれむすこ人の手代をしてのたの
しみあまり又大黒とてる内へ入込花のうち
をのこれ下を住家とする者行りさて月囲の
女ハおぎわく志んちまて六うし店にて縁つき抱
あふるゝ○賓日庵とりあずの娘あり紋多乃

なふりもよくへまうちありしが娘が世にうりまさ
び内ハ也つとり青ござのこしおりを召おん
ぞり撫りかんをて畳楽焼でち内にハ不礼多
まるいる庭に奥のうろこきりくしみぎるし
入にれ戸に油ぬる中へ犬が衣ふるくきその竿に
ひぢりめんの二幅をひろぐしく店ちんへかり
さへあるれども大屋さ兎をを蔑如おしらりまる
おかへもおりくハこのむすめを出して内證の持と
を是をハいましへ提重といひし数くいく今

寄る地獄と名付て世におこなはれしとぞかくは
おそろしげなきむすめなれども惣七が弟はいろま
したゞ氏経姓かものことごとくおとろへしきて
だちの女子をことごとく紀喜のうちにも又も奉公人
衣類はやぶんかりのすき屋枚の表乃わたちや
くるしみやをもしめとしきるゐ町の下総やが
おかりを人をまろしあぶ○○寄りあさ
ぶれ草筒町のかたりよ古着具や安兵衛といふ
ものむすめおつやとてふゐちも十人なみ

ちゝおや安兵衛にわかれ十五のとしまゝれ母の養育
またことし二十一才になりけるが生まれつききくらしに
母のかゝりて労しけるをうれ井におもひ侍
をりをりて掘乃表務茶のさんらちあちち
やとひくる衣類のゑへものゝいとなみ司奉公
そしもせぬよしきこへられば浅諸やるなとりせ
てまて言ひよしいかや方へ給金は女子月二朱で
の小づかいをまく二度の志させかつよもきつくのふつ
けとて外に金子三両をうけとり母もそこしはよせ

どらくにくらしける五十や廿七八例のはくしみふ
かき男なれバたでめしつかひの下女同おまをひぬ
この女もいまゝで母ふつくきてをとるすき生れは
きさ妹まこの亭主ハ美男なるをうれしきるすまお
めひずいぶん内業ハものにもよくおしらひかり
そめにもめらけいぶらぞよつとめられバ夫婦の気
ま入りをま女房ハちじめより佛参なれバ孫
さこそ○むこてろなりられバいと申よくかくおは
やがはくしみつくるに廿七もふびんさまきりて

孫んごろま可愛がりけり

⑥こしもとおやうが中

内義おきよが縹えまおさんとてきさちきよりえを
ひけるる女去子ハやよひながだらりおりくてづらふ
をと申ゆり五十屋ハおしより宿家のこと頼れバ出入
ハ醫者もおほく本屋ハ本町の元山雲朝
老なりおハ横山町ハ蟹坂空見屋おんまさりハ
柳橋の随来随庵などとりくおよさいなく
療養させしくじこてろよ紀くるしにもなく女子

もいつまでかくれせ話さねばなりまじくもれきの
どくさなれば一まづやどへ下りつゐにいろ〳〵
したき孫ぐひよて六月の末やどへかへりいろ〳〵
醫療をつくせしかど中〳〵急にはかいふくお
ぼつかなくみへそれをも長いとまを孫ぐひしも
ひよく此方をとりかりその秋親族のせわに
ておやうとよべる女十八才になりしとつのおさん
がうりのこしおとし子抱へよりこれおやうハ行徳
の入江なる袖乃浦といへる里のうまれなくそ

十四の時おくづまへ伊勢やといふ宿有りける米や
の姉娘貞とて紅屋よこ町の別宅に隠居し婦
三四人めしつかひたちに後世をいとなまれ
人は又年がりどかしづき居りしがそのね
友々の娘貞尼往生せられたるにおやうもいとまいで
夕り袖の浦の親乃許よりも幸なれどいふらん雲
へくるなにいひこしなれどこの女とせがわいゝ
ぶをたしき江戸に居なれたる身になませんい
田舎に住ふんの心もなければとかく傍をかりと

めて屋敷(やしき)がゝへこしけれど奉公(ほうこう)の望(のぞみ)なりしが
いづや知音(ちゝづき)のきによそがたりてその方(かう)より
この五十屋(いがや)惣(さう)七といへるかしけれど奉公(かうこう)によとえ
けし此(この)おもうハ幼(をさな)きより容貌(ようぼう)うるはしく
そのうしさまやうにいと高(たか)志づかなる生質(うまれつき)をび
が癖(さう)らんざといふハまことしもにくからぬ田舎(でんど)に
ハ泥中(でいちう)のはちすにいさごの中乃こがねなるべしと
金偏(きんぺん)の農民(ひやくしやう)もそやしこの子(こ)をバ江戸(えど)へ
出(だ)してたのもしきまでもうれしさバよく味(あぢ)めで

たく氏(うぢ)なくて玉(たま)の輿(こし)にさいはいもあるべしと
そゝめしうだ容貌(ようぼう)もひとりの娘(むすめ)をもてなし
がつくハおのれしらずかく田舎(いなか)に一生(いつしやう)をを
ぐさせんより繁華(はんくわ)のお江戸(えど)へ出(だ)してよき
ありつきもなかれせむと江戸へつれいでゝこの
米屋(こめや)のきんぺんに隠居(いんきよ)に奉公(ほうこう)させたりけるかの
妙貞尼(めうていに)ハさりき時(とき)よりやまし寺の道(ところ)ん
をよせし人なれバ今(いま)ハ隠居(いんきよ)の身(み)なれどもけるく
念佛(ねんぶつ)のひまよハ十種香(じしゆかう)源氏流(げんじりう)乃いけ花(ばな)なり

れ繪かき花むすび遊松越え山をかくれあそび
つまならで遅ゝくる夷は日ハ義乃わとり
初音は一聲を発らし蕭て老る秋の霧れ
月のまへに須磨乃一曲をおくべきを沈は淼
なとを雲の迹うと会じ庭は志る雪を照り
つりなと謡ぜらるゝなどいとめでたき禄花
ありして小娟おかき中にもとりつれてこ
のおもり初おりつとめまめやかなるそぶち
なれど一しか氣に入て何弁によしでおもう

きめらくつらひは手ならひ歌書はよくくせ
なつけがしなどおぐ禄んごろにおしへらきしその
才もをとするなるにまかせて髪かたちも拵とり
えぶさしだなりをれバいまハ坂陸の猿文もみちぢ
んかどの顔色なり梅が香を橋は花て白を
せて柳が枝りさらせまるぶし壺山乃まゆ美
容のくちびる楊貴妃がまつひに西施が顰小町
の小町がえりりしに伊勢がまりつきも是にれ
いつでまさるべき今さいぶやはらしりしおかき

中にこのおつまがもとハおかべとし瀬戸物町の
おとこ操やれおそでも此評判ハきゝつけられ
よりされぞ近所のむすこまでいりの手代らう
人廻船まで老若貴賤ゆりだなしに云伝を
子ゆへみやるゆへかりそめのなりね日くれあるとも
店のでつちが被しはふえれよくぬるひまでなく
きされどこのおつまハ十四才の時よりこさあらず
しさぬ貞節よかしづき居てつとめぐれ義訓
にも女子ハ外へ稼せざるうちハあしぞ男ノ

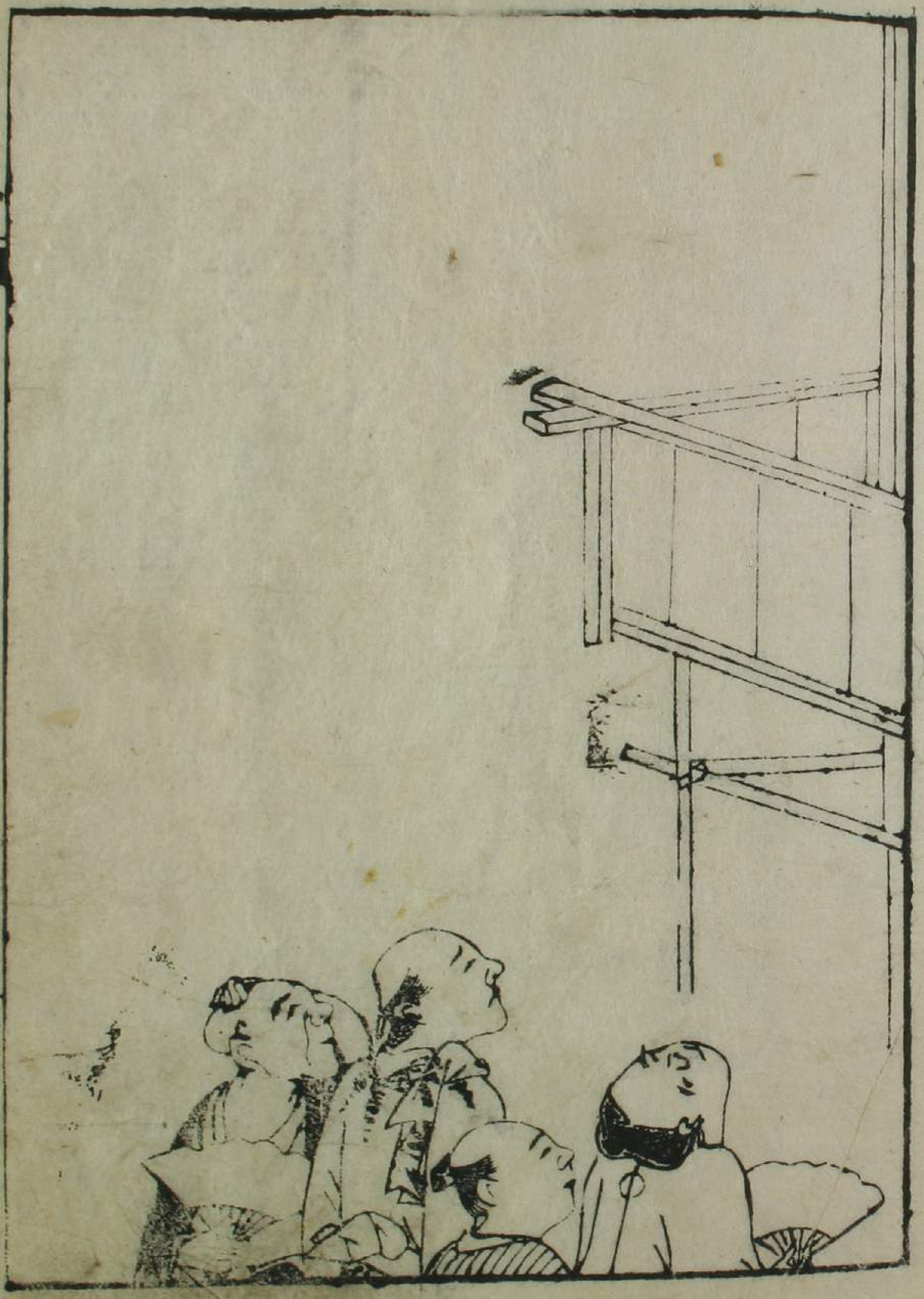
まえぬかのあり飛鳥川の淵瀬とかはり秋乃
きそれさまざまぬれ男心のかはりかれバよしや
ひそかにかくふかきは後ハうき名をくだすと
わりなどおしくられまするのうくにせばまりて
る時ままませぶれバいかなる人り袖つなひかれ
いかなる人の身玉章もたなはちきいくへのしをして
ぞ色ぬされどもそ十二三より性根あつさ十四
五でハうだ容よでるかいまれ世乃中に十八才さ
まぶ男のふところをさへしらぬ雪は解てこゝろ

ぐる下ひもしむすぶえにし八身はよめよおもし
の一夜や露かりはさけきのもゑ乃二日のちゝ
まきくあがる洞の雅をまきそめし由来是
つかがかんだんのところでござり升る

㊆色の世乃中

恋せざる人も心をなやまし其のあはれも是
よりぞ瓶目づかひを画の山にすしてひとつて人給なる
ぬ玄は紫といのり人めはやせきよ鵺の閑若とあ
やありふしとがめらるきあるハひとり森がちの

床もはしく我みづから我ましひるがへし裾八一句
このこゝろ神よらくへど又きてかしありかげを
猶りてまされんもなしたゝく待宵ぞ待遠実坊
主ぞうしこ更行夜手早鳴乃家鶏をにくむなん
どぞ恋の家中とハいふべし出会がしらよ袖つま
ひきゆりむすしに双かはなせてあしだぞおしなふ
ぞハそれまであんどハうちふきまて夫あるさだ路
沢れはせらし紀紫部屋のちよんまハ宿あるし犬
地系猫は交よしそあぶつき男のくせとして命ハ



そのじにちりあくさせあて一竅ハまよこまれたと
蝶くのかんざしらんで出る雲かうそハ百よあや
なされるく女ハあきたつなる子ハ者をたらぶり梟
ハ先智恵までおそらくハおきなうでハあれ籠
よおこらむまじと嬉しがりてうかづき赤もらひけ
ぬ浮名よ一生をおやまる〳〵下品の虱とやいちん
真の野よおさるきびす秋の山り妻こふ鹿、
まうろり師走猫の恋志りがかなるお粟ろ乃
是ハを茶うしる大路の犬ハちくんべよう川

あひせつあたりして世人の顰をせ合薬やよ
もる荼幌をもふるにいきしいけるのいづれ
つらどたのしまざらんちうらをも入をしてよ
り入るも黄金ハひりなるらんよ八生得精乃
虚したる人の富貴ハ家にうかれしうりとよ
玉の巨常なしとやいちん笠のりおせんが
伎香よるるの下ハながき日とこそれやなぎ
屋おふしがのにに複の座るもあるゞ一文字
やのおせんもいうしうろし滴りしぶりとなとやの

おもだちしも今ハちんさく兵法人なし芝のおかぐん
がぶき見せするハ義太夫をのせかれさせんとし地
蔵お京が藝れうきも美なるをめつらしきもの
なりけりしくよ岡場所也来月くすり地藝
おこふ四三味せんのまくらし光沢の威勢を見
せ百助が油チ本田れ容雑をあちらに湯島
の楽所ハ神子ぞよろしく半紙頭し護
渕の開帳ハ英壹にくらして伝へ流湯なり
岩井半四郎 名ハおかるが評ばんよかろう

祇園豆腐の淡薄ハ京女のひやうちんまよろしく
なり女芝居の見物れ茶まつりれをちりにようじ
まで流し於兎市が力持ハちないの乙女よ纤
をひやきしむ五文銭をえて八是をりて洞乱の
皆なかのりせんとおごり四文銭をえて八百よ
て根津へ四かくれ去る世の何りものたゝかれの
儒学の弁を世の中をおりのひ拵するた仁者
もはんぶる親仁も目のつぶれされ故も今ひ
とはやうな病人も家中のあるしにそん

うつりかひ底うしおかしぐる世のなかひたのり

草紙巻之二 終

草紙巻之三目録

八 椎不繁花の事

九 惣七とおつるが中比事

十 おきや祈いえのうたなかりし事

十一 こびぬきバの奇比事

十二 袖の浦乃権兵衛むそめつるに逢う来る事

㊇ 梅雨蟹養の事

されバ梅雨のあきうど大方あつぱだ彩吉
原の普請日くようしぐり出来月くり
天井をもらくにあつくハつくべきれども先
あらしくてよしとぞ深こ助てうなが
うけ出されしたる住きて分社名ある女房
社病氣よひきあのりたるをうれもうけ出
さて是もうけ出さろしなどいひちやす

まくらさぐる女郎の病氣ハ見うけのはなし
よいひるし役者の病氣ハきんさにしろく
しまかハ當世の流俗あくさうへバをやり病
はあく哥ハくもの上乃御製ふるり地口
ぢつくのおかひつきハ栖逆が作なりしと
いふ類なりさて深川の丹ぎるひらき町
かもをさくをとろましれ近きに
とめしかとしやしるしに引くる
家くに生田流の筆曲戸てに十寸見要

集をかくせり塩干はなれいふもさらなり天王
寺の丹ぎるひ月見のはしごさわまさぐるは
大軍を引うけくよく城をうさめ芝山乃
和尚ハ引手しく陛下は極楽に往生せさ
しむる品川ハ娼子の美色をもつて客を
まねき新橋の揚屋ハ花盛をもつて客
ゆとりに深川ハ合羽を第一としてその
情なきを賞翫を古橋中町とよんで中町
古橋なりたとへバ五郎十郎といふがごとく

ちなみに助広治といへる倆あり三弦ひ
かさるを芸者としひくのを羽織しに羽
織芸者ハおりく役者をとりく男芸
者ハ時〻毛纏をうけるをぞなやみおるこの
ハ娘評判記にものりたれバ美なる事
しるべし土橋まるおりし狩野ゆお七
ハ雲龍をかしん為菊を志づめするにも
河かぞいふ子のおしかハ花嵩りふざ
け上総のおりへハ閨中よなくかぎやの

お安がうつくしき河辺屋ゆおしかゞちよて
ら深川第一と称すべき総角かぐりハ
よひそしゆ床よとりく〻孤臣しく
色男をあし山の二軒茶屋ハ口杵茶屋
といふべく十二男ハまる二十りんともふ
るしやくろ下にうつおめておつく後
そそつぎを差にこの吾仲町やけて
また裏楼下ゆ焼亡するを何者か志る
りたん一首の哥をたてぬ

中町からをさへしらずすそろ浅ぎ
やぐら下から火事はのふ逃
そのかつ彩地三百堂石場入船さつさをせ
〳〵をせくのそて八永代寺ところも
お川よありくも悪しさハうつくしくと
根津音羽ら諸の花のいろは茶屋東
西南小こきまぜし浅草寺ハ藝者
といハ廻向院よれ山猫と名づけ赤木の
明神もうかれ色まよふて盛をましる稲

荷もいろけなく八うつくしかくらん比丘尼ハ
びくめんとらるる奴が貰ひけころだちしれ
けしろと売女なる人が貰ありう海上ようへ
むまんぢう舟法地をしけるよたかまぢく
いづれもしし銭ぶにかへせぬ思案是なん
内ようしめる女なくかつは暁しきまなく
神祇釈教恋も無常もひつくるめて
まことに色は世の中なれバ金さへあらバ
とうくたちかまきあそぶべし人間まげり

五十年といへど四十からハはたちとも数へよし
その内(うち)も十七八までハ何の心(こころ)もなく世(よ)を
をくらせバさし引(ひき)のこり二十二年(ねん)かとなる
さへ夜ハ寐(ね)て過(すぐ)せバまづ十一年(ねん)之
それもとかくかつひつゑしなる人乃
あんしんするもなけれバよく遊(あそ)んでくら
かゝるが五十年(ねん)はうちに丸(まる)十年(ねん)ハあそぞ
れぬ人間(まんゑん)世(せい)とあるべし
㊈惣(さう)七とおさてうが中(みつ)は半

さればバ五十(いが)や惣(さう)七ん朝(てう)暮(か)おはやを窮(ちう)
愁(わい)しろもこうしけらはおつうがみゑ
うちのうりくうりしに心(こころ)うりく
客(つね)は玉(たま)づさたまくもいろよきさへしを
松(まつ)が枝(え)のおりくとよ浅(あさ)かくぬ心(こころ)をあら
せ玉(しま)あしきのとるあぞうりはかくちぐさ
をさらく人目(ひとめ)は関(せき)すり乃ひ方なきつり
こるぐしくハいげ心(ころ)のいひもあへど
とおもやせよりおつてうも惣(さう)七が男(をとこ)ぶり

といひ何(なに)くれとやさしき心(こゝろ)を嬉(うれ)しき
ことに思(おも)ひながらの妙(めう)貞尼(ていに)の遺言(ゆいごん)といひ
孫(まご)にハ妾(めかけ)おはやがまへをもえうりてにく
からぬいふくのこしらへ素敵(すてき)なり男(をとこ)も妾(めかけ)
おはやをこのおやうにでんかへさしいふて
てもなく孫んじろにつやをも待(あしらひ)れと忠(ちう)
孝(かう)まりさらしぬと云(いふ)ものなおにて文(ふみ)れ
ものうまいぞはりしせぬ世(よ)の中(なか)こち
らをふめバあちらがあぐる道理(だうり)なれど

おりそだかし(底)ハうときお方(かた)にもなりなん
しそのとしもくれてうしはるにも
なりぬ百千鳥(もゝちどり)さへづるあるは八物(めの)どもあ
たまれども家(いへ)心(こゝろ)ありしあらぬ虫(むし)どろ
をうるゞがちなる熱(さう)七がまてろのふけ
をみそまちおもひ入る情(なさけ)もしはいろ
まで草(くさ)はいりまでおやうも志(こゝろ)の草(くさ)
はなの志のびあまりにみひ海くらめ
ありなき中(なか)とやなりなりにもあるひ日(ひ)にし

りしおてうらん仏壇あしきていよふく霊ちり
うちふしられバ斎おはやし何かにおゐて
はく女子なれバさゞめてあやくにても
おこりしあらんと丸薬させなんと用
ゐしておてうが寝間よりゆきたれバてい
しゆ吉七と一ツふをあてぬし居より
おめひげけぬすあれバおつやもおどろ
きてだん那さまへおてうおはやどのハア
ちよん〳〵〳〵

(十)おつや称よみの主なりしか
悋氣の深こしよハ是を嫉妬といひ日本
りハ是を称さむといふ流俗今ハやきもち
といふ諠嘩中華よハまこと闘諍といひ
日本よ是をあらそふといふ流俗志やき
くいざこざといふいさおさハいざござれ揚
貞せんの略語なるよしある知識の申さ
れ侍りし舜の娥皇女英ハ中もよかりさい
なし松風村雨よいざこざもさたもなく

梅の由無儀にゆきめちのそうしもきら
ずこれん行平の中納言も梅の忠義
もどこゆうにきつしやな處ありて二人
のをんなにらんのふさせしうのあるべし
さてもおはやハかく二人がいろの事り
くされ縁しるともありて今まぐしそある
よりまさとへにハなどおさまりけ
むつごとを女ごりまたしき居し事
のあさえかさなと心の角もあしたを半

ことなみるまくれるがさしたがなをとある
き女みるとかく心をたづめ何とてくるしさ
なき所にハおもりあそびせしとの詞よなり
つきるく惣七らいやいうふおつきうか積善よ
てくるしむときくし而ふ便さに志やく
をおきくるゆうんさめ来りしがいつのま
にやうところしきそふなとどけよう
まにあひれ助成風よくにくうだおつるう八
きへもいりときおめひ詞にハおはやがあら

にもいらぬをとおしさま申くもうし
さもそひは惣七もおつやが心のうれしく
きうしかんじて是よりたがひにおもひ
きりりのごとくはやをわすれみたり
(十一) とびぬれどの弁はるす
とびぬきだ今さ聞しかるにあち方を
つくしても奥んとぞおのふし元良親王乃
よみ給ひし八代撰和歌集の此歌に入て
その頃中さしにてきうこ落り京極御息所に

はうちしるるとありこの京極のみやす所
とやせしれ牛ぶちくらし奴蒼蝿めらやい
こにうめたまひし本院の左大臣時平公
はれむすめにして宇多帝に寵せらる也
あひし歌方より元良親王は陽成院第
一の皇子にてまふらせ給ふが京極の御息
所褒子にふかく打こみおもひおりしは
御出合をなをそまかじとおぼしめしあ
まかくれしさるよりあくまでたへ八あしとしくる

ごくいつのまにか人もしりくうれ是をて
さまざまいろくのうきさもおもて向に
あらはれやあふ事もならぬやうに
なりあひし時のこと中に所へよんでく
つかまされしくよくく思ひまびらちく
しんがくうるにしよせんもやたちし
名あれバ又名をとるもおなじ名
しやかにいとひハせじぬれぬさせ
にそ露ほどもいとくし後世分別の此和哥

とかやされバ悋燼は火がつきやすきひ
ならひなれば惣七もおかぢもとんと思ひ
きりし八三日ぞかりてまくめとの木阿
弥とはなりけれバ女は美悪と
なく宮に入りてそねまるなかひ故に
美女は悪女のあだと華人のいひし
ごとく傍輩うちにも酢のきんにやくの
といひぶんがあれどもさしと旦那との
色事あれバ後指もまげてさし嘴も

耳雑談ぐさもあしぬ

○袖の浦ハ鈍子染むるやうに逢に来る事

五條の三位乃歌かくる袖の浦なみと
よミ給ひしハ出羽の袖乃浦なりかつしや
まゝに漕ぎきて志りつふを行徳の入江ハ
を袖の浦といへるあり入江のきはしき袖
形よ似たる故志か名付たるハ三味線堀
など同し例なるべしその行徳乃
袖の浦ハうりとりま鈍子染といへる古民

ちおつやうが親なり金才の事なれバとし
の内よ八度〻江戸へ出くおつやうが容貌の
次第にうつくしくなりゆきそれを見て八
國めぐり此母へハ此ミやげにとしろり志の
鈍子染を月十一日まで晝なしぬかどもり
用事あるよしよくいがやの評よきた
来りおつやう八髪を結ひけたるがちよと
むすんで出いつも夕方よ見へまふ哉
をやきしそあやしまれ余所よとなり

あひての心がまゝといへバ拵來りし中より
いやくたにはかしぞきのふの宵寐にあや
しき夢を見つるが心にかゝりて斯こそも
をあしぬればいとあんじ是もあん
じられしたる夜ふかく中より出てきた
れりその志さいはるが産佛の伽陀堂
の地藏菩薩まゝりとに立あひてあん
じがむそめてうち捨おとしし江戸にあらバ
家にまざまひをうくべしとやく國へむ

くとるにはしとまさくししくえんへあひ
つるが今も目にちらつ浮くであらりその
うへとし八十九才女の太尼ときくてさら
ずはらふ夫婦も次第にとしもよるなみの
立居につけても一人のそなたちへいとゞ
あんじがちなるうへ今めきや耕作も
としよりてはをもざればいとゞなとりもい
とゞき似合しき男をも招て二人をもう
けくささせよとこそあしく中らはなも

おとろりぞうしおやうもつくづくおもふに親
のみなもとへなけれどかく自やする
江戸ニ住なれて田舎へ引こまんとすれ
いかなるおそろしき嶋へもゆりようなん
めちして中くその心もなくまして
惣七がふかきなさけに身をまかせて
ひよくれんりと後世のとつとを忍ぐ
のその末までもかならずかはらじとちかひ
しそのうへまりはやおなさに云ぶんさく

出来し後の中なれバ今ハ惣七が薬湯へ
いるまもまちかぬるかどのおもふくとなく
ひきとなれんハおのひをちかぬ手にて
おや権兵衛が詞をきゝつけてもむねつと
ふさぐる思ひなからきを志川めくいかに
やういかにもれりともなるにはすさりかに
かくさつのと探へまいりても此彩遣な
こりてきげめをいかにき今へさやちり
めんの截ぬひもいうしてぬかどうり

ありしをこのかどへはこびつゝひらかれば
んなくはにいとぬを祈がんする恩ありぞ
とやおぼしめさんかどに一向にはにいとぬ
のなすハ中出さるまじ時は嫁れなそむ
しよりぬ臓のまづつゝひとりひまさゝ
ゆめとてよきなすをみれバあしき事
ありつなしにたすをとゞれバよろこびごと
ありと人もゝせバさりとされきまうけ
まかまじなさくしハこの御家がふさい

まゝなやゝいせやぬれぬんきよ様まつとあ
しうちハをりく風もひき猿もおこり
しにこなさへあがりてよりハくさめひとつ
せぬまでなれバ母へてくはきつゝひくぶ
さるなきなどくし一寸のぐれもこの家よかり
とき云まるし親檜三味も可愛ひ我むを
めはことをなけるいふまきゝとれしいかに
もめつとも志ごくむうしろきゝされさ嫁
をみれだがうぞへ金がをいるとよろこび

ちりあくたを夢とみれば立身出世もするなり
などいふ手がさればさのこときよかくる布
はて夜あるまじきさゆふそあさ乃
事のこおりひく寝さまもさまされさ
逆ばかりる夢をもつたしみんそのうへ
さかどの仏きんの御いみをむりに夢見んが
ためひの安眠がたゞうれませぬのと
自由がましき寝もあるまじ来年の
三月ふもなつばどふなりと又そまで

まよき算もあそばせんきましてせうん
くもくもしれ大事れ厄年なれば
何とぞ思ひもぬ事にとこのある村の
庄やどのと大師河原へ御新供の日まいり
その時いふさきて盆しと様中しきたりし
まりなどまうしおとうが髪をきよく
となゞめてそうさんこのあるよりいたしの
外におりやせよりなにぞん所よかくる事これ
あるよやかなつだまづく姆くれるなどで

いつまかハらぬ歌をうちまもりやうもおやの
歌をまもりておしへにたがひよななみだを
ながしけるも道とおもひなれ居る親
子なる者いつもかくあるべきことながら
是この世はまうれなきは自然とかく
ありけれと偏ほやおのひろりねらん
てうハ慶つうれ揩のちいさきとり出し
是ぞ二三椀ば然おりとめさる揩なれど
今は風なうねど晏用の物ありゐ中の

くしも田舎にてハずいぶん重宝なるす
なぶん是を毋揃よそげのハ遊し幼かの
時園のしようさしまりし本は算す
をへて数しけるとのちれ記念し表く
揃ぶ傷れ志くよくあてめ拙がう
のこる所なくそまさ盆の時ぐきたる
べし随かそくおまなどいひてく出し
が何事ぶん心のこりせしらふかくさ
たびみさびおてくし例より名ぶ話

おしげはおまつを門までおくり出し
さらばと見送りかくて涙のかわく袖
の浦かゝる徳はしそ捴りけれ

草紙巻之三 終

文明堂

婦女草紙巻之四目録

㊔ 妾あつやまんきの事
㊕ はや篠水かうと中濡へ宅の時まてぬる事
㊖ 二十三夜待
㊗ おはやおまつを殺す事

草紙巻之四

（吉）妾はやまんきの中

もろこしの班婕妤ハ孝成帝にをさめられ
世乃秋風を紈扇に託して寵を長信宮に
奉し和朝の妓王妓女ハ平相国にをさめられし世
身を秋草と障子に詠じて世を嵯峨に
のがる是らハよく己をしりよく道を悟より
といふべし妾つやハ色にふけり誇ひし
人のむくろハ花とちり霜乃夕時雨に時ならぬ

秋風をりよふしたる袖の露毎にしほれて
我身ひとつは枕をうらみがちなるよの
おもひありちじわれかとはさしもをとなしく
見ぬふり聞ぬふりは日を送りむ○をさきもり
てのそゝしられと思ふが子のたゞなるぬよし
を我もしり人もしりぬればかくのごとく
なるしも此際は吟なして中居がいふをきゝ飯焚
火ハ法界悋気れりへさしつときがまゝ
が吹つける薪葉も子をこがせしのあてこと

むかしたく火の竈において我ひらく人へ
さらに人をうらむも道理なりかゝるおりひめても
里ゆや十四月は夏より風の心地とて十八日の
頃まで湯気をさちく井みしより
⑫津や篠は其中にて一世の時まうでのる
蜘の井にかれゝる志るハ法なくてもあさこち
おく斎あさく人をちかりかもうしやおかりそぬも
あくれうしの時まいり無と然といふさしさの
三つは鉄輪ならべそくのひかりも捨まおそ

ろしく胸のあたりのまへに鏡かけるならひも
祢がひまゝしとなるならず婦にあやしかりくろ
くとこそ聞けれ髪こがみて洞をしかくし入り
あらましにいたりけりしとそのすがた里やそのころ
此池のあたりさへ釘(くぎ)の音はるかへてあそこし
さてその丑此時(こゝ)まうでといふは鉄輪(ごとく)乃物(もの)に
らうそくを三つ結付(ゆひつけ)ことのし是(これ)をかしらに
いたゞき髪を額(ひたひ)のかたへきりさげかきさばし
むいぶんかしらいたゞしに丑に常よりこと

こゝ黒歯(かね)くろぐろとつけ胸(むな)の前(まへ)に磨(とぎ)て
たる鏡(かゞみ)をかけたる足駄(あしだ)をはき釘(くぎ)をかなづち左右(さゆう)
の手にもちて随分(ずいぶん)しづかにあゆむなり
是(これ)を丑(うし)の時(とき)まいりの法(ほう)なりとも深夜(しんや)に
女一人行歩(ありく)ゆへ路(えち)すく尾籠(をこ)の者(もの)に穢(けが)され
ぬやうにとかくおそろしく作りなしてく
ありくと是(これ)むかしいかなる智才(ちさい)此女(をんな)がしくる
をぐさを工風(くふう)して今に丑の時(とき)まいりの故実(こじつ)
とはなりけんとおもしかくてはやれ病気(びやうき)の

弟ありてひとり部屋に引こもりいかさしらへ
てや夜毎に此家を志のびやく三日が間我伝
作る池の端は御しろへ出よりをし
て地内は松のうしろりたるにおびさしき
釘をうちくつるをたそハ呪詛しくれさて
三日の行おこりてさぶらぬていに起出くるゝ
れおしよきとて粥などもくらふれどうき
くるもせたでつうが病氣のいづるを嬰兒
の娘あくる中うにいまやをそしとまちうれど

その證さうにあらはり法華經は普門品に
も呪詛諸毒藥所欲害身者念彼觀音力
還著於本人と説給へバいかやうにいのるとも
まがれる筋は神も佛もうけ給はずして
我身を害するとぞありがたくもまたおそろ
しきことなりやされバ内典には女子を地
獄のつかひなりとおどし外典には女子と小人
とはやしなひがたしとハのたまへり

㊄二十三夜待

得大勢至菩薩天竺にてハ摩訶那鉢とや
を無諍念王第三の王子なりとぞ縁日ハ
二十三日午時より乃人是を信仰をして
午のとし乃者ハ二十三夜待をして祭る
本地也七も午時よりあれバ勢至菩薩を信
じしてまつりき正五九月の二十三夜待
まハ一家一門ハ勿論仏中をき朋友よりして
町内の人々をもよびあつめ浄瑠璃三味せん
のためしをまつハ謡よりこれをもちて夜を

ありしも其月二十三夜にもの或人まで
みぎりいのやま婦ハそのふ義をまぶし
をきて世話をするまま子どもあまた有り
されバ今宵もまた四五人のくにまじりてお
つきさをでに浄瑠璃をうたひはじめられ柳
浄瑠璃の濫觴ハ天正年中小野氏の女矣や
作れ此若乃長者が娘浄瑠璃と牛若丸ちき
くり合せ十二段につくりしを岩船といふ目
くら法師是に節を付てかたり出せり慶長の

頃沢角検校ハ琵琶ハ上手なりしが後三絃
を手練し此の十二段にあハせて是をもてあそ
び後世此人是にならひいろ〳〵のむかし
物語り平家敵討の類をもつの體にはくりて
語りぶんにし上るりが変を演しよりちぢ
まれる所にて其名を浄瑠璃といふなり
其の上るり三味せんなきハ前ハ歌舞妓など
といふものもなけれバたゞさるがくをのミにてあ
そびり此能といふものも東山時代に出来る

なり観世観阿弥始て是をなせり此観世ハ秦の川
勝の末流にて俳優なれバ渠に命じて此技を能
しむ是より能ハ神楽を和らげたるものなり又狂言
も同し此始ハ高官なる家ハ上へ遠く卑賤の者ハさと
なりし又しれぬ為に俳優によりて世下の有さま知らし
めんがためなるをあらぬ事を作言狂しく狂人の言葉の
ごとくなれバ狂言と名付たり今又歌舞妓狂言といへるも
慶長年中出雲の国大社の巫女阿国といふものと名
古屋三左衛門といへる江州の浪人かれら相ともに始

是形木を變風し舞うたひ妓女のなりふりなれん
歌舞妓といひけるに二人の娘あり其さい又
これはお国と名を譲り二代目とも此舞をなしや山
三郎といひしあまたの舞女をあつめ四条河原に芝居
をたて是れを後女かぶきお止とて名高かりさま
なりしが是又お止まりけるに今の後は立て花
の額髪をとり若衆のてくしにて芝居を立し
とかてお髪を僅に剃て帽子をかぶり是をとく
まを野郎帽子といふ此野郎帽子も又薩摩の国学

あり今の世にては名をしもかけまたれん捨といひけり
其比にさるわか勘三郎といふ者芝居の時あり其後寛永
えさるの中橋にて太鼓櫓をあげされ又今の堺町
へうつし夫より葺屋町木挽丁の芝居も立ならべ
さる人同じく繁昌して紅葉の名をまたも時の役
此に新狂言あつて似せ役者附に人をなし其後山縣
の播付は殊のいさまずしくせるも紋かんだんさとてし
は大名顕出て役者の晦日の衆は蔦屋くの蜂羅花
をうきり紋画のてうちんますへ輝く手和に勢者

面々ずつひいきの役者に狂言まくしはじめ
おもひ付せいろう俵の山を築き積霜日数をとめて
当所の正月と祝し惣役者の入舞祝りの和
是とて狂言をはじめ入来る見物一番太鼓二
番雑三番さう開き狂言序ひらき合
暁とも狂言より固人は口上角々角にて
人の鮨を祝し其顔見世ハ仕切場に諸芸もてなし
簾なく何たし今日大入は切落札売切なれば暖簾
を松ハ木戸番の声ねままもおりぬ八先元日ハ公翁

よきしの式例狂言の仕初今一きハむかしきさ立物
ハ神狂言嘉例の曽我まつりし役者当りをとれり
あらしき趣向をとりし世話事の狂言縁刷を
まし続て五月は今ハちや曽我祭の儀式狂言の
その内も名人上手の芸者あつまし物ハ初し聡さん
れせあつ鬼神を歌武士も跡をぬらし
ぬれ事のむかしハ四方まで八奥方の女中も気をとめ
うちを夜あかせ今ハ昔のおだおだし知をてうし
功者芸のさんさん嬉れうれしさるのそろし狂

仁義礼を以て忠貞孝悌の道をしらしく善悪
邪正あきらかに誠かしこのきをしるべき事娘子
出しもすむべきなりとの心をこのしく月をもろとび
し貴賤おしなべて尊ぶ心の安さ得たる事を
かなるぞいとろふうつろふ人ならば
㊄おはやおかまりを殺さず
外面似菩薩内心如夜叉と仏もおそろし
かりの人女ぞりしかのはやかんの角をおしくし
何ともね願して神力を待てとらひなくある

うらめしの浮世やねさましのなかなかりやと
ひとつおもふこゝろもかきつめしうしの角のし
おもひ出くもきざむもゆげこめじいきてたい
なき我この身命をとらせなへやし仏神に
いのれどもそのさへ神れうけじとやみさ
らし川のそめる世ににごる心の袂をひろく
悪行乃闇のくらまぎれかへりちよまかし
なきもなあらし一もちまちおのひつ先しぞ
ぜひなきさるかぎりに夜もふけぬとて急

人はさかなくひなれば鶏肉もさかな森よりお
よひはいつとなくおさけやもうきくしおこう
はなひいろく御酒し酒などもかはりていさ
むつましくなくなれバおもうはめつらしく
おさけや餓鬼ぎがんよく酒さかひさかなをくうれ
きまゝにおのひ下戸なかしもこうしたるし
よるよやかなく醉あふく二階の戒魚やよ
厨にありて串したり烹の刹るたしもつや
いろのかどかねをさ出しらん葷酒入をさき

し積一様より出しまづあやのつりて
を切落しゝやごしにおそうがむなかし
おりふあるりをさしきをしくもうさ
なを戒咽よつきたてゝおりさなりて死
しろりりをさるゝし邪語のまよひふ
くしてうの一様を偸盗せしまんまと
おうらうを妄語く飲酒をそめて殺せぬる
殺も五つ村戒のつてハ釼の山くしもあるさ
ちうきむつれた六つの道にややまちかゝん

草紙巻之四終

秘本 文明堂

累草紙巻之五目録

(十七) 浅草寺開帳龍燈の事

(十八) 祐天上人の事

(十九) 絛水のくちなをおそれや解脱の事

(廿) 五助夢物がたりおもてう成佛

草紙巻之五

㊀浅草寺開帳詣等の事

もし浅草寺ハ観世音開帳ありて参詣群集の事ミな人しるところなりそも〳〵此霊像ハ人王三十四代推古天皇御宇二十六年戊子三月十八日漁人の網にかゝりてあらはしよりこの地に安置し奉りしとくハしくハ前太平記などにも載る世の人しる所なれバ今

さし寝よのへを藤沢寺時宗の上人この
宥帳よ夜参ありしかバ折から龍燈を
みんなふと江戸中まぞつてバ法し
あへり是れ龍女識佛の縁よひかれて
観世音へ龍宮此をとひめありさげ
みふ宝燈あれいあかく元まの眼り
見おくべきとにいつじとぞいへるためし
この以前おうもありしにや雑談集よ
云丹後此府中に鉾立の道場といふ

時宗寺ありその上人愛阿弥陀佛れ
九世此戸の文殊をちんぐうせし是毎月
よ三度参詣し通夜しあひろく附て
龍燈をたげくえあふといへり竜燈
とハ橋立きき是と二丁ばかりの中よにて
うり一堆あかき所あり是を龍宮の門
也といひ伝へたり天気よく波風なき
夜きれとうりとのし火出く文殊乃
此前ゑまいる仏道の人れ見る事

まゝありあるひハみて漁火ありといふ人
もあり文殊堂の前二十間ばかりそなみに
たかき松ありその上に龍灯とまる凡半時
ばかりありてきゆあるひハもやくきゆる
ありし松の上に童子ありてともし
火をさゝぐる事あり是をば天灯といふ
ありむかしハ天燈しげかりしが今ハまれ也
と云々

㊅遊行上人の事

さの遊行上人と申ハ亀山院の弘長
年中にはうしよ伊豫の国に住人河野
七郎通弘が二男別府通秀といふ人二人
の妻をたくはへて甲乙なく寵愛し
けり二人の妻もたがひに睦まじき所なく
朝にハ蟋蟀の詩をうたひ夕にハ龍田
山の歌を詠じ月花にむしろに酒くみ
かはし糸竹の遊びにハ弦をもたてんの
中なれバかくふるまひ給ふさまなきうらし

さるほどにしんじあへり通秀もいとやさし
きん中の者どもとおもひ不便いやまし
なりしにある時かよりゐなり遅きを待
かねて二人の思ひ人枕合せし訴屋より
通秀ハ歌によみ一間をうかゞひしにふし
ぎや儀に物さわがしきをあかりにひゞき庭
の木草もさわぐしと風も才に志む中へ
これをしるぞと一間の障子をさつとひらい
てみれバよくみんなくゆしたりし

二人のくろ髪まつさつさかに蛇のごとく、かま
首がつ立くひ怒をなしわさなしその通秀
こまげ立向きせて詞もなかりしかまでと
にをそるべしかゞ面似菩薩内心如夜
叉とよせくる佛のをしへまの何より歟
よ白粉丹花乃唇よそほひつさりて花のごと
くたぐひよ稀しむ歟もせぞうちつえよへ
中よき禅よめてなし心の底よ邪鬼
執念さへせぬ讒捜をそのれと歟ちし

かくる沖ましきていもしくいまそしやけがら
ちしや是なん菩提の善知識とこそてま
をふつときり僧衣とりきまをく智真
坊と号し西山の善恵上人の會下に
いより浄土の一家をこゝろむる十一年
その後建治中熊野の證誠殿に参
籠しあひ直に権現の正體を拝し
奉つり神勅を蒙りて諸国を遊行
し法を弘めあひ六十万人決定往

生の札を出しあひのち相列藤沢の道
場藤沢山清浄光寺を草創しあへ是
を一遍上人とすあり今の遊行上人まで
五十三代ありとぞ江戸神田山日輪寺も
遊行るとすれ今度も此所に遊行した
まひくかく龍灯などもおぼくあひとの
風呂ありしその利益まの何そりあれ
ばこゝき老さるをしみべくえなはれをぞ
いらざるかくあたうこときたとこありぬれば

おつやおてうが罪障消滅の供養として五十
昼夜七七日夜この上人に薪水の仕へ
をなしければ上人も二人のをんなが
始末とくと聞きいとふ便のために思
ひ入れければすけて念仏しをしへぞ
往生極楽うたがひなしとありがたく
しそおかへし　一の

㊈篠がくちなもおつや解脱の事
古事記日本紀などに後妻とあるを源

順が和名抄に宇波那理と訓ぜられバその
かくハのちに妻をうはなりといひしまが
轉じて後にはまんきするすなはち
葵の上乃論にれうをなりけのかん振
舞とひまして管が字をといへる俗
書に八女二つれ中へ男をかくうをなり
とよませよりきくいのしへと今と云
然の轉じたるハかなしきれあられむ乃
といふ詞ハおのしろきすにめちひおもし

ろき心をおかしといひさびしきをさうく
しといひしたぐひあまたあり然し
きてろぶとれいろしつところてんと
と申するをこころちでといひおろしこころさいがところてんを称しるる精(てん)じ生干節(なまびぶし)れなま
まぶしと訛名(なまり)ハとうがんでなくれだ
通(つう)ぜぬやうになりぬ解道(ぞうご)ぐがちやも
庭(ぞう)なをびとハよぶなりけり諺(さぎ)むよめ
の庭(ぎ)がくてまとうくるちくせう志也せう
ちごくあるひハけうくるん大けうくるんと

うへども六道(どう)よりそ畜生道(ちくしやうどう)といふハ
きけいまだちくせう地獄(ちごく)といふをきゝうず
まさ流生(るざう)といふ地獄(ちごく)も耳(みゝ)なれぬ也へ
ある僧(そう)りたづるこれぞ等活(とうくわつ)黒縄(こくじやう)衆
合(がふ)地獄(ぢごく)などて八大地獄(ぢごく)のうちなれば
とうくわつちくせう志也ぜうちごくれとう
くろこくぜう志也ごうちごくれおやまり
なるんといへりさて六道(どう)の中(うち)のちくせう
道(どう)といへるは人(ひと)死して其(その)つく罪かき

おのれけものまたハとりは虫のたぐひへ
その生をうくるをいへり古乃池の蓮
池頭の槙は木乃とし経りたるにその
さけに尺あまりにもみえぬるくちなハ
はいとくるしげにくれなゐの舌をいだし
かつそのうろこをさかだてゝかの古木をまと
ゐりしをみて参詣の諸人おそれをのゝく
きみわるくおもひて中〳〵あたりへよりつかず
爰にたくまし紀老ありてちかくよりて見居

しかれどもすこしも人にあだつくる気色もなく
又人に害をなさんとにもあらず三日
が間この槙は古木にまとひありしを何
ものゝいひけん是ハの御法や世の時まで
をしく三月が間朽ちし木なりかゝる
罪によつてかく毒蛇と生をうけしならし
といひしがその夜いづちゆきけん失にけり
されば是ハの極楽上人の観音念仏の
功力によつて解脱の身となりけんと

これ人中侍り
㊄の助菊がゝりおもしろ成仏
みどり子は抱上て迚く図見裁といへる
発句は瀬川古菊之丞王子の稲荷
の神勅によつて今の菊之丞を貰ひ
得りし時の句也とぞ寛延三年午の秋
中村勘三郎座にて瀬名よ奉四十七文字の
升粧云り瀬川古菊之丞一周忌のふ
これ恋しむりそふへ点ぐきの肘笠思ひ

出を一めぐり秋蝶形見翅といへる名題
まで今路考かはる吉次として八ツのとし
石橋の所作見物目をおどろかし猿子
鳳凰は卵旃檀の薫とおひさ紀めで
たくおもひしもまさりて今乃世
界に浅草は観音と路考をひいきせぬ
者なかりしと三のかゝりは評判記にも
のせける実さる事ぞかし親瀬川氏へさし
も名人のきこへありしだに瀬川がなし

の名のミ称せしに當世ハ諸考菓ん路
考糕のとおてを申寸町の素人諸
考紺屋町の路考娘など人口に膾炙
せるもの揚てかぞふべくほど去れは和泉
町へ油見世を出して日々に繁昌せり
とうく雁も鳩も食ふ人があるとやう
ふてえつう油あしろひよりなじめ化
粧の具よいふるまで是がよしとつうひ
おぼへしを遠能の者に製作させて是

をひろめるをなれば一夜つうひえしし人
へその製は器をおぼへてかのをば用
ひぬをありこの油見世の下男与助と
いへるハ行徳袖ケ浦の土民権兵衛が末はし
てうのこりとおやうがためには伯父なれ
どろ細あつて縁をきり江戸へ出て
おくま下がらきをつとめ居るうりしが
五十屋の始終をきゝてことのかり愁
傷し寝食をもわすれてかなしめる

も一人の姪此弟あれバ実方なりけり
いまだ二十にもたらではかなくなりし
のちハあまつさへよこさまの死をとげし
なれバ罪障のかずもさぞおほからんせめ
て念仏一遍の回向をもなさばやと無縁
寺にまうでゝ志きこえつみ水たむけなど
して老女とはきゝぬれどまつき
をさなくてのこせるハありしひなれ
身をおかふにもとりまき国乃姑親の

なげきハさぞとおもひやられいとゞ涙よ
りきくれぬるに叢ともなくおもふ
がをぐるあまりちれほりくの君なり
ばんもきゝへたましぬをもうしなふべき
をかなしく思ひとおもひおもふがをぐる
なればきいさき法雲紫さへなみだに
むせび入よりおもうれそでもかくる
うきめを三ッせ川たへぬなみだも法えぬ
ぬ袖の浦なえよるとなくひろとるまで

父母のなげきさらりつむ山の名はたかぎ乃
責くるしみをありがたや一遍上人へ
頓着おこらせたまをぬけしかくひとり
よつて今極楽世界よりうまれかはりし此
父母よ告しらせやしくは侍れどおや子は
一世とて二たび夢まざに逢するき地
府の命令なれどよくはたらくあそ迄
と夕つげ鳥は夢たてゝ夜人が夢は覚まけり
草紙巻之五 大尾